

木村朗子さんによるレポート 2019年10月10日（木）開催

「写真／光をうけとる」トークセッションーもうひとつの写真に触れる

Vol. 3 ゲスト 山本昌男さん

山本昌男さんの作品をはじめて拝見したのは、スパイラルガーデンで「空の箱 XI」という個展が開催されていた2000年のことでした。

スパイラルガーデンの長い壁に、手のひらサイズの写真が並べられたインスタレーションは、見上げた空に満天の星がどこまでもひろがっているような美しさで、その空に吸い込まれた私は嬉しくて走り出したくなったことを、昨日のこのように思い出します。

山本さんの作品は海外でも非常に人気が高く、ご活躍の場はひろがり続けています。国内では清里フォトアートミュージアムにて国内美術館初となる個展が始まったばかりというタイミングで、トークセッションの日を迎えました。

山本さんの含蓄のあるお話は多岐にわたり、そのどれもが貴重なものでした。お話全体から漂う薫り高さものに包まれながら、みなさまと一緒に山本さんの魅力を堪能させていただいた夜でした。

私からの質問「作家としての一番の想いは？」には「美の病です」とお答えくださいました。清里フォトアートミュージアムの個展で紹介されている映像のなかで、山本さんは「美しいものをみれば心の中は平和になる。それも明日からなる。今からでもなる。世界平和はなかなかならないけど・・・」とおっしゃっています。

私が山本さんの「美」について考えるとき、山本さんが幼少期を過ごされた美しい景観と温暖な気候に恵まれた三河の地のことを思います。ご家族や地域の人々とともに過ごすなかで山本さんのなかに育まれた「愛」が、山本さんの作品の根底に流れているような気がして、幼いころの思い出についてもすこしだけお話していただきましたが、作品と同じ「温かいもの」を感じました。山本さんの「美の病」は強い感染力をもって私たちによい方へと導いてくれるもの。今後山本さんの見識は、美術の世界を飛び出してより様々な場面で必要とされるのではないのでしょうか？

参加者のみなさまからの質問が続くなか、簡単なワークショップをおこないました。

「山本さんの作品を言葉にするとしたら？」というお題に、みなさまが小さな画用紙に「言葉」を選び記してくださったものをホワイトボードに貼り、共有しました。

「小さいオルゴール」「垂」「波紋」「静謐」「祈り」など素敵な言葉がたくさん並んで、山本さんは「もったいないです。ありがとうございます」と、おっしゃったうえで、言葉で説明できないものを言葉で補足しようという作業の重要さや、良寛の俳句にある言葉の力についてコメントしてくださいました。

続く交流会では、先行発売していただいた『手中一滴』（T&M Projects刊）にサインを求められるお客さまの列がつづいた後、山本さんを囲んで、引き続き貴重なお話を伺う時間となりました。

山本さんの個展は12月8日（日）まで開催されています。
デビュー作の＜空の箱＞・＜中空＞から＜川＞＜浄（しずか）＞そして最新作の＜盆栽＞シリーズまで約170点のインスタレーションをとおして山本さんの「美」の世界をご堪能いただける貴重な機会です。
ぜひ清里へお運びください。

次回は、11月28日（木）に私と同世代の写真家・今井智己さんをお迎えします。

お互いの作品について質問を出し合いながらお話ができたらいいですねーと、今井さんと話をしております。

みなさまの中にある、まだ開いていない「写真」のもうひとつのドアが静かに開くでしょうか？

こちらもぜひ、お運びください。

木村朗子